

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.213

ISSN 2432-5295

特集

ハレ



C O N T E N T

- ◆ 特集【ハレ】…01～04
- ◆ 今、こんな仕事しています…05～07
- ◆ 視察報告…08～09
- ◆ 近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆ まちかど…裏表紙
- ・ ハレを見つけに商店街へ

マンネリ化したハレの日の楽しみ 都市・地域プランニンググループ／石川聡史

ハレの日と言えば誕生日やクリスマス、年末年始ですが、年齢を重ねるにつれライフスタイルに変化がなくなり、これらの日々も毎年同じようなスケジュールで過ごすことが多くなりました。だからといって退屈するわけではなく、特に年末年始は独特の時間の流れの中で過ごすことを楽しんでいます。無理に新しいことに手を出さず、「マンネリ化した非日常」を楽しむことが、今の自分には合っているような気がします。

今年の抱負もここ数年は変わりませんが、新しい分野への挑戦とこれまでの専門分野の深化について、バランス良く取り組みたいと思います。



明けましておめでとうございます。

ハレの年始に、アルパックのスタッフからハレのメッセージをお届けします。

各人にハレにまつわるエピソードと新年の抱負を語ってもらいました。

ケがあるからこそハレ。

ハレのときにばかり注目が集まりがちな昨今、ケのときを大切にするまちづくりこそ大切にしたいと思っています。

2019 年もレターズアルパックをどうぞよろしくお願ひします。

レターズアルパック編集委員会

2 分の 1 成人式 サスティナビリティマネジメントグループ／植松陽子

先日、10 歳になる娘の小学校で 2 分の 1 成人式が行われ、子ども達が舞台の上で一人ずつ将来の夢を発表しました。デザイナー、パティシエ、野球選手、サッカー選手、ダンサー。焼肉屋という子もいました。自分の娘も含めて小さい頃から知っている子ども達の成長を感じる感動的な時間となりました。この子達が無事に夢を叶えられ、安心してそれぞれのハレの日を迎えられるような社会、地域になるように！そうできるように！それが私の根本にあるような気がしています。そのために、日々の仕事の中で、日々の生活の中で、ワークとライフをリンクさせながら、今年も精一杯、地域と共に取り組んでいきたいと思っています。

心穏やかな 1 年に 都市・地域プランニンググループ／稲垣和哉

大学では写真部に入っていました。写真部に入ると、まずはフィルムで写真を撮り、暗室での写真の現像を経験します。暗室ではセーフライトの微かな光はあるものの、真暗闇の静かな空間です。光は禁物ですので、携帯も使えず、完全に 1 人きりの時間と空間がそこにはあります。現像には時間を要するため、自然と物思いにふけるのですが、それが日々の生活をリフレッシュする良い機会となっていました。

繋がり過ぎた社会で、個人と仕事の境目も徐々に無くなりつつあるように感じる中、今思えばあれはあれで数時間の非日常であったのだらうと思います。たまには 1 人きりの環境で雑念をデトックスしつつ、心穏やかな 1 年にしたいと思っています。



「新たなスタート」を切る気持ちで サスティナビリティマネジメントグループ／駒和磨

自分のことではないですが、昨年一番の「ハレの日」は、友人の結婚式です。これまで、親族の結婚式には何度か出席していましたが、友人の中では結婚第 1 号でした。大学時代、サークル活動で切磋琢磨した間柄であったので、友人夫婦の「新たなスタート」をお祝いすることができて良かったです。また、来年度は、社会人として「新たなスタート」を切って 3 年目。仕事にも慣れつつ？、スタートした時のフレッシュな気持ちを忘れず、初志貫徹の精神で頑張りたいと思います。

昨年度から個人的な目標としてスタートしている「日本 100 高山制覇」。昨年は、石川県・岐阜県の白山 (2,702m) しか登れなかったのが、今年こそは時間を見つけ趣味にも没頭していきたいです。

ケのなかのハレ 地域再生デザイングループ／木下博貴

あけましておめでとうございます。さて、昨年のことではありますが、私の住まいのある愛知県で朝夕に冷氣を感じ始め、木々が少し色づき始めたころ、秋田で農家を営む友人から、季節の便りをいただきました。赤と黄色の落ち葉を添えて。日頃、手書きの手紙をいただく機会が少ない私にとって、昨年うれしく感じたことの一つです。季節の移り変わりに敏感な農業を営む、彼だからかもしれません、季節を感じ、誰かに伝えられる、やさしい時間の使い方に、私までホッとさせていただきました。今年は、そんな友人を見習い、仕事でもプライベートでも、少しのゆとりと気遣いを忘れず邁進できればと思います。

ハレを取り戻す一年に
地域産業イノベーショングループ／高田剛司

「ハレ」と「ケ」の概念は、民俗学者の柳田國男によって唱えられたもので、日本人の生活リズムを表したものだと言われています。「日常」のケに対して、ハレは「非日常」として祭礼や年中行事などに特別感があつたはずですが、自分自身の最近の正月を振り返ると、ハレ的な過ごし方がかなり薄れてしまいました。それは、便利な 24 時間 365 日営業のコンビニやショッピングセンターができ、ネット社会によって年中つながっている生活環境やライフスタイルにあるからかもしれません。

スマホを持たない、コンビニに行かない。今年はそういう日も作り、ハレの日を取り戻したいと思います。

「ハレ」がうまれるところ
地域再生デザイングループ／嶋崎雅嘉

「ハレ」の日とは、その人、その町にとって大切な「お祭り」「お祝い」の日です。例えば、誕生日はその人個人の記念日かもしれませんが、その「ハレの日」を祝ってくれる人、感謝する人がいます。「お祭り」に遊びに行くと単純に「わくわく」しますが、その祭りは多くの人たちが過去から脈々と受け継いできた「伝統」そのものだったりします。「ハレ」の日を祝うことで地域のお金がまわることもあります。「ハレ」とはそういった人や時の間を「つなぐ」ところに発生しているのだと感じます。今年一年、そんな「つながり」を意識して「ハレ」を感じる場面に多く関わることができればいいなと思います。

これからの「ハレ」に求められるもの
サスティナビリティマネジメントグループ／長沢弘樹

正月や祭り等の「ハレ」から、祝祭感が薄れたと言われます。明治の頃からの指摘ですが、近年加速化しています。私の関わる廃棄物分野では、イベントごみ削減のため、祭りで使う容器を紙コップからリユースカップに転換する流れがあります。これからの時代、祭りでごみ減量は当たり前ですが、それで祝祭感を喪失しては本末転倒です。

1つの解として、ドイツのクリスマス市のように、クリスマス柄のリユース陶器カップを利用し、祝祭感の維持とごみ減量の両立を目指す流れがあります。

期間の短い日本の祭りでは難しいのですが、これからの時代に即した「ハレ」対応はますます求められるでしょう。そうした取組にも関わっていこうと思います。

10年の節目に
地域再生デザイングループ／戸田幸典

私事です。昨年、結婚して10年を迎えました。地域社会との接点・貢献(PLUS SOCIAL)をテーマとしたウェディング。それから常に暮らし方と働き方のテーマにしてきました。

偶然なのか必然なのか、この節目の年に妻の地元であり、大好きなまち「丹波市」のまちの未来と住民自治の支援に関わる仕事にどっぷり関わらせていただいています。

実は、「次の僕らの拠点は丹波かな～」と思い、あちらこちらに「5年以内に移住する！」と宣言してから早2年。次の10年間でチャレンジしたいことは丹波から地域社会の未来をつくる仕事、働き方をつくること、でしょうか。

万博再来
建築プランニング・デザイングループ／原田稔

2025年の国際博覧会の開催地が大阪に決定した。前回1970年の大阪万博は49年前、当時小学2年生の私にとって、近未来的なユニホームを着た金髪のコンパニオンや奇抜な形の建築は、まさに手塚治虫のアニメに登場する未来の姿で、ただただ興奮して一日中会場を歩き回ったことを今でも覚えている。恐らくあの万博で我々の世代はみな同じような体験をしたと思う。そしてその体験が私のように何かしら漠然と未来を創造する職業や研究に進むきっかけとなった人も多いと思う。

2025年大阪万博は私たちにどんな未来の姿を示してくれるのか、そしてそれを一番楽しみにしているのは実は我々70年万博世代かもしれない。

知らない人と祝うハッピーニューイヤー
建築プランニング・デザイングループ／塗師木伸介

ある年の大晦日夜、私はインドの夜行列車の中にいました。寝台にぼーっと寝転がっていると、周りの乗客が急に騒ぎ出しました。年が明けたようです。その時になって気づきましたが、私の周辺はみんな家族だったようで、家族同士手を取り合って祝っている輪の中に私も入れて貰いました。異国の地で知らない家族と一緒に過ごす年越しは不思議な感覚で、見知らぬ私を招き入れてくれる人の温かさを感じました。年末年始は自宅でゆっくりする派の私なのですが、いつもと違う行動をしたおかげで不思議な体験に巡り合うことが出来ました。

本年は「いつも通り」だけではなく、いつもと違った行動によって新たな人や体験に巡り会えるように日々チャレンジを忘れないように過ごしていきたいと思っています。

自分の時間も大切に！
総務部／前江田晴香

私は月に2回ほど書道のお稽古に通っています。習っているのは、「上代様」平安中期の和様の書です。一年半に一度社中展を開催しています。その特別な日に向けて沢山練習して……というのが理想なのですが、現実にはなかなか家で筆を持つ事が出来ていません。お稽古日には数時間しっかり集中して書くことにしています。

家では家事に子育てにとバタバタ過ごす毎日です。我が家には1月で6歳になる娘がいます。保育園生活は5年間、やっと歩けるようになったころからお世話になり3月で卒園です。4月からは小学生。新たな世界に飛び込んでいく娘に寄り添いながら、私自身は、仕事はもちろん、色々なことへ質の向上を目指し邁進したいと思っています。

知らない町でヒントに巡り合う
地域産業イノベーショングループ／ホアン ゴック チャン

「晴耕雨読」の生活に憧れますが、どちらかと素直に読書することが少なく、出かける方が多いです。最近、新生活への旅立ちやディベート大会のピークタイムの日々からやっと抜け出して、「日本」のための時間を作れるようになりました。先日、福井県鯖江市・越前市で開催された「見て・知って・体験する、作り手たちとつながる体感型マーケット」のお話を伺い、休日に鯖江市で一人旅をしました。知らない町を巡り、街中に散らばっている特産品の眼鏡の姿を収集してみると、住民の街への愛情が伝わって心が和む。「町を持ってまちづくりをしているなあ」という感想です。ハレの日に頑張れるよう、「休日」もリフレッシュしながらこうした新しいヒントをインプットできるような生活を維持できればと思います。



「意志が弱い自分にサヨナラ」
公共マネジメントグループ／丸井和彦

昨年末、今年こそは痩せると誓いを立て、様々な方法にトライするものの、むしろ体重はプラス傾向に。これではいかんと思い立って、先日、泉佐野市の犬鳴山・七宝龍寺へ行き、「修験道修行一日体験」を行ってきました。

「懺悔、懺悔」と唱えながら山道をえんえん登り、草木に足を取られながら下山。息をつく暇もなく、白装束で滝に打たれて身を清める約5時間のコース。膝はがくがく、ふくらはぎはパンパン、肩は上がらず、もうへとへと。

それでも修行後の気分は爽快で、終了後のビールのおいしさたるや、まさにユートピア。気分は爽快、晴れやかで、2019年こそはダイエットに勤しむんだという決意表明の日になりました。

初心にかえる
都市・地域プランニンググループ／松下藍子

ハレのこともそうではないこともあります。昨年1年で心に残っている出来事は、5月の韓国歴史的集落の視察、文化財関係の計画づくり（継続中）、資格取得の失敗、一昨年の仕事が新たな形でつながったこと、軍艦島と長崎の傾斜地を歩いたこと、10月の姉の結婚……。その他の嵐のように過ぎていく日々がほとんどですが、仕事では1～3年目はいろんなことをやりながら、5年目の現在は元々の関心を中心に戻ってきているような気がします。

探究心をもちながら、研究するように、地域に愛情のこもった計画づくりができたと思います。初心に立ち返り、今年1年を過ごしたいと思います。

節目の年
総務部／柳井正義

今年は新天皇が即位される。

徳仁親王殿下と学年が一緒の同世代の小生にとって、29歳で皇太子となられてからこの年を迎えるまで30年は長かったのか短かったのか、なにやら感慨深い。陛下の生前退位について議論があったが、世間一般の感覚としては「人生最後まで現役」もいいが、「どこかで子や後進に道を譲り、その晴れ姿を自分の目で見るのが楽しみ」というのも親や先達の自然な気持ちとして理解できる。しかるに、当人にすれば「晴れ舞台といっても通過点に過ぎない。大事なのはこの先だ。」と考えているかもしれない。さて小生は今年で還暦となり2巡目に入る。RPGなら2巡目は違う楽しみ方もあるが、どうなることやら。

「ハレ」を支える「ケ」でありたい。
地域産業イノベーショングループ／水野巧基

去年は、妹の入籍、末っ子の妹の中学入学などのハレの日を経験しました。特に妹の入籍は感慨深いものでした。生まれ育った家を出るという点では、寂しい所もありますが、ハワイ語では「家」をhale（ハレ）と呼ぶように、明るい家庭を築いてもらいたいものです。

日本では「ハレ」に対して、日常の意味合いを持つ「ケ（裏）」の概念がありますが、ハレの日を迎えるには、日常（ケ）の努力が必要です。業務に置き換えて考えてみると、地域が「ハレ」の状態を迎えることができるようにお手伝いをする「ケ（裏）」の仕事だと感じています。多くの地域で「ハレ」が迎えられるように「ケ（裏）」として、この1年も精進していきたいと思っています。

たのしくつづける 建築プランニング・デザイングループ／山崎博央

先日、息子（中2）の晴れ姿を見てきました。ゲームにしか興味のない息子に何か打ち込めるものを、と3年ほど前から始めたエレキギター。ドラムを習っている友だちと一緒にバンド形式での発表会です。始めた当初はあまり興味も示さず練習もしなかったのですが、最近では課題曲だけでなくネットで気になる曲の弾き方を研究するなど、上手くなるごとに楽しくなってきたのを見てとれます。そんな中での発表会。なかなかの出来映え（親目線）で、自己評価も及第点のご様子。継続は力なり、を感じた1日でした。振り返って、簡単なことでもなかなか続けられない性格の私。今年は「つづける」を意識して日々励みたいと思います。とりあえず、早起きから始めよう。



次なる12年に向けた1年目 都市・地域プランニンググループ／山崎将也

年がバレますが、干支の5巡目を迎えました。4巡目の12年は、東日本大震災とその復興支援への従事、アルパックへの転職など、個人的に大きな出来事がありました。5巡目にもなると健康にも気遣うようになり、なるべく歩く機会を増やすようにしています。どちらかと言えばハレよりケの街並みや人々の活動、営みを眺めるのが好きで、元気をもらったり、現在の自分の立ち位置や少し先を見据えて何をなすべきかを考える時間としても活用しています。次なる12年を実り多いものとするため、まず今年は考えたものを積極的に行動に移していく1年にしたいと思います。

公民連携の先進地「紫波町オガールプロジェクト」を学ぶ 地域再生デザイングループ／山道未貴

天気はハレではなかったものの、岩手県紫波町で開催された「公民連携まちづくり塾」に参加してきました。紫波町では、JR紫波中央駅の町有地10.7haを、民間のノウハウを活用し図書館や新庁舎、多目的スポーツ施設などを整備した公民連携のまちづくりを進めています。まちづくり塾では、現地視察やレクチャーを受けながら、自分たちのまちの課題を整理し、リノベーションまちづくりの実践計画を3日間かけてじっくりと取り組みました。

来年度も引き続き、描いたビジョンが実現できるようアクションを仕掛けながら、多様なプレイヤーを巻き込み、まちの魅力を上げていきたいと思っています。

原点回帰

地域産業イノベーショングループ／山部健介

「ハレ」と聞くと、「祭り」のイメージを持ちます。人のにぎわい、鮮やかな色彩、色々なものが入り混じった匂い...上手く表現できませんが、そうした雰囲気大好きです。先日、休日の神戸・中華街を散策してきましたが、かつて、アジアの某都市で体験した「旧正月」のにぎわいを思い出しました。にぎやかさの押売りのような、でも不思議と元気をもらい、好奇心を掻き立てられるような、あの感覚がたまりません。ここ最近では、そんな感覚になることもあまりなかったように感じます。難しいことは考えずに、常に心はオープンで正直に、色々な「刺激」をもらいたいと思います。原点回帰。

自分でつくる「ハレの日」 公共マネジメントグループ／渡邊美穂

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

私の「ハレの日」はピアノの演奏会の日です。演奏は10分弱。一瞬で終わりますが、曲は1年を費やしてやっとのことでなんとか仕上げているため、演奏後は1年のおわりとはじまりを感じます。暦や季節行事の「ハレの日」とは違った自分でつくる「ハレの日」です。このような「ハレの日」を感じられるのは、今は年に1日だけです。ただ自分の心持ちでつくれるものだと思います。数年後にもう1日つくれるように、今年をはじめの年にしたいです。

センス・オブ・ワンダー 都市・地域プランニンググループ／依藤光代

こどもたちが2歳と4歳になります。家の近所に大きな樹の茂る緑地があり、親子で集い遊ぶ活動があり、我が家も参加しています。レイチェル・カーソンが著書「センス・オブ・ワンダー」の中で、自然に触れることで培われる「神秘さや不思議さに目を見はる感性」の重要性を説いています。森の中の葉や虫などの身近な不思議に興味を持ち、その環境をじっくり見つめることは、こどもにとって「学び」そのものです。そして素養として身に付けば、自然だけでなくより広い世界に視線が向けられていく可能性を感じます。例えば、都市の美しい「ハレのまちなみ」に向けられるように。こどもと共に新鮮な目で世界を見て、一緒に成長していければと思います。

JR松山駅周辺の景観まちづくりに取り組んでいます

羽田拓也：

地域再生デザイングループ



駅周辺の夜の景観づくりのアクション

駅周辺の整備事業の機会を活かし、そのまちに訪れる人や暮らす人にとって豊かな駅前広場の景観や情景づくり、持続的な賑わいづくりに向けた検討を行っています。

JR松山駅周辺では、県庁所在地の陸の玄関口としてふさわしい魅力あるまちづくりに向けて、連続立体交差事業や土地区画整理事業、街路事業などの検討や事業が進められています。

それらの事業と並行して昨年度より地元主体のまちづくりの推進を目的として開催されている松山駅周辺の地権者等を対象とした「松山駅周辺まちづくりに関する土地利用勉強会」において、良好で魅力的な松山駅周辺地区を目指し、駅周辺の具体的な整備の方向やイメージの検討、地区全体の活性化に資する様々



景観まちづくりのアクションを検討

な情報収集等を行っています。

今年度の勉強会では、昨年度策定した松山駅周辺の将来像に基づいて景観づくりだけでなく駅前のまちづくりの観点で「やってみたい」「あるといいな」と思うことの具体的なアクション（活動）として、駅周辺の魅力的なスポットを観光客や松山市民に知ってもらおうマップ制作、駅周辺の魅力づくりとしてライトアップなどの試行、駅前広場整備に向けた他都市の魅力的な駅前の研究などに取り組んでいます。

こうした景観づくりの取組なども踏まえ、松山を訪れる人や松山に暮らす人たちにとって松山駅周辺が、まちの魅力や豊かな暮らしを体感できるような空間となるように今回の取組がきっかけとなって持続的な活動や仕組みにつなげていければと思っています。

全国の産地から 1.2 億人の食卓へ効率的に「食」を届ける卸売市場のシステム

原田弘之：

地域産業イノベーショングループ

三千万円でマグロが競り落とされました！昨年完成した豊洲市場でも初めての初セリが行われたことでしょうか。近年、卸売市場の経営や再整備に係る仕事が増えつつあります。

現在、全国に中央卸売市場は40都市に64カ所（すべて公設）、地方卸売市場は1060カ所（うち公設151）あります。それらの多くは卸売市場法のもと昭和40年代に建設・開設されました。高度成長期の都市への人口集中に伴い、全国の産地でもれた農産物や魚介類等を効率的に都市に運び、分配するシステムです。直売所やネットショップがはやり、産地と量販店等との直接取引が増えつつある現在でも、国産青果物の8割は卸売市場を経由しており、南北に長い日本列島における重要な食流通のインフラと言えます。

しかし、市場施設建設から40～50年が経過し、多くの市場で老朽化が進んでいます。また食品流通に適したより衛生面に気配りした低温保管や、物流センターのような効率的荷捌きも求められています。さらに市場を活かした地域活性化などへの期待もあり、現在、市場を抱える自治体で再整備がホットな話題になりつつあります。一方、卸売市場法改正により、これまで全国一律のルールであったもの

が、基本的には市場ごとに、民営化も含めて開設主体や取引ルールについて定めることになりました。もし全国の市場がそうした柔軟な運営になると、強い市場や事業者はより強くなるような弱肉強食がより鮮明になると思われれます。

このように市場内の事業者は、施設面と経営面で非常に大きな変革期を迎えています。さらなる悩みは社員の高齢化と若手人材が集まらないことです。特に、深夜から始まる仕事、重たい荷物を運ぶ仕事、社会にわかりづらい仕事などの理由で、優秀な人材が確保しにくいのです。それは将来の経営にも大きな影響を及ぼします。

話は少し飛びますが、卸売市場の仕事題材として取り上げた漫画があります。国立大学農学部を卒業した主人公が卸売市場に就職し、奮闘するお話です。いくらがんばっている生産者がいても、いくらよい農産物があっても、その価値を発見し、評価して、消費者に届ける人がいないと意味がない。それが卸売市場の仕事だと語る場面が印象的でした。



JAPAN BRAND in Chugoku REGION

高野隆嗣：

地域産業イノベーショングループ

**山陽&山陰の「ステキな10社」
にお会いする機会を得ました。**

経済産業省では、平成16年以降、中小企業の製品・技術の海外展開を支援するため、JAPANブランド育成支援事業（以下、JB）を実施しています。弊社も平成24年から4カ年に渡り、京都試作ネットの皆さんと共に、米・独における試作ビジネスの開拓に取り組みました。

そして今年度、中国5県のJB卒業企業等を対象に、その魅力を取材して、国内外に広く発信する機会を得ました。数多あるお会社の中から、選り優りの10社を訪問、その魅力をたっぷりと取材させて頂きました。

広島県のソウルフードと云えば、そばとキャベツがたっぷりのお好み焼。5社ある専用ソースメーカー中で、(株)サンフーズの「ミツワソース」は、ビール

に良く合うスパイシーさが決め手。若い頃から海外各地で自ら実演販売されてきた布崎社長は、「広島文化を世界に」をモットーと



されています。

一方、広島から高速道路を利用して車で3時間、中国山地の奥深く、「たたら郷」にある奥出雲町は、ブランド米である仁多米の産地でもあります。この地で町内産の米と水だけで、最高の酒造りに挑む奥出雲酒造。若き蔵人たちを率いる寺戸さんには漢惚れします。

この他、熊野の「かわいい化粧筆」で快進撃を続ける晃祐堂倉敷から「クレイジーなデニム」を世に問う241など多種多彩。詳細は特設HPにてお楽しみ下さい。英字・簡体字のほか、日本語も用意しています。

また、2月には在日海外領事館やバイヤーを招いた交流会も広島市内で開催予定です。ステキな出会いがたくさん生まれて、JAPANブランドの魅力が世界に広がれば、とても嬉しいです。

中川貴美子：

サステナビリティマネジメントグループ

持続可能な集落とはどういう地域でしょうか。よく使われる「持続可能」ですが、イメージするものは千差万別かもしれません。

平成30年6月にSDG。未来都市として29都市、自治体SDGモデル事業として10事業が内閣府にて選定されました。10事業のうち、岡山県真庭市も選定され、エリアの持続可能性を確認する石高調査やAIを活用した将来モデルの検討、またモデル集落（社地区）で具体的な実践を重ねながら持続可能性を考える取り組みが行われています。

社地区は、真庭市湯原地域に位置し、京都にある仁和寺の領地だったことに加えて、美作国の式内社の11社のうちに8社が集まっています。さらに、「式内八社」と共存している仏教の「大御堂」など中世の歴史が残るとともに、近世のたたら製鉄に起因する棚田風景も残っています。この地区で、地域の住民の

真庭市でSDGs 未来集落形成に向けた取り組みが始まっています



地域の資源（茅：蒜山地区）で地域の資源（大御堂：社地区）を復活させる取り組み

方々とともに、これまでの取り組み（放棄竹林対策や特産品開発）や新たな取り組み（市内の茅を活用した大御堂の茅葺き屋根の葺き替え、小水力調査、デジタル観光情報の整備など）を話しあいや試行を行い、一歩ずつ進めています。それらの取り組みを積み重ねながら、地域の将来について考えていきます。ことはじめの寄合では、40名近い方が参加され、地域への思いを確認しました。



集落でのことはじめの寄合

事業は昨秋にスタートしたばかりです。それぞれ取り組みを通じて、今一度「持続可能とはどういうことか」に向き合っていきたいと思っています。
※この業務は、畑中直樹、植松陽子、駒和磨、武藤健司も担当しています。

「人工知能AIの開発をやめるべきか」

ホアンゴックチャン：
地域産業イノベーショングループ

人工知能AIの開発が日常生活にすぐ大きな影響を与えるわけではありませんが、筆者のような日本語学習者にとって極めて意味深いテーマです。

2017年、東京オリンピック向けに50言語以上に対応した「ポケトーク」が登場し、この100グラム足らず重量の機械が普及すると「通訳・翻訳者の多くの仕事が奪われてしまうのではないか」、「一流の通訳者を目指して一生懸命日本語を勉強してきたことは無駄になるのではないか」と話題になりました。

普及に伴い、通訳者の活躍する姿が変化するかもしれませんが、無駄にならないと信じます。むしろ、言葉の変換にとどまらず、通訳・翻訳者にはこれまで以上に新しい素質を求められるようになると考えられます。それは思考力です。人工知能は一瞬で沢山の単語の組合せを提供できます。が、空間・場面に適して判断できるのは人間しかできません。

多くの日本語教育現場では文法・漢字等を熟達させること重点をおいています。同様に思考能力及びコミュニケーション能力を上達させるカリキュラムが必要となつてきます。

そういった勉強法の中でディベートがあります。この素敵な「頭脳スポーツ」を広く



取り組んでもらうために、ホーチミン市日本語ディベートクラブは日々大学の垣根を越えて活動しており、毎年市規模でディベート大会を開催しています。昨年10月、1ヶ月にわたり、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターとアルパックスの後援の元、HUTECH大学でディベート大会が開催されました。「人工知能AIの開発をやめるべきか」というテーマで決勝戦を行いました。試合で否定側が勝利を収めたましたが、論戦がまだまだ続きそうです。

来場した日本語教育関係者からは「生徒が勉強した言葉を使って、自分の意見を堂々と発表する姿を見て感激した」と感想をいただきました。

花苗生産農家さんが障がいのある人の雇用を検討されています！

廣部出：
公共マネジメントグループ

京都の大原野にある農事組合法人「花トピア大原野」さんは、主に花壇苗や鉢物の生産・販売をされています。

併せて、地域社会における花と緑の拠点となるような環境の創造、また、里山文化の継承・発展を目指されているのですが、今般、働き手の高齢化と後継人材の不足の状況から、「京都市障害者雇用促進アドバイザー派遣等支援事業」を活用して、障がいのある人の雇用を検討されることになりました。

同事業では、伝統産業をはじめ様々な民間企業と障がいのある人を取り結び、雇用に繋がってきていますが、農業分野での事例は初めてとのことで市からの期待度もMAXです。

アルパックスでは、いつもお世話になっている社会福祉法人京都市身体障害者福祉センターさんと一緒に、アドバイザーとしてその取組をお手伝いしています。

季節や花苗の生育段階なども



ふまえて、障がいのある人が安全に円滑に作業できるよう、作業工程を小さい単位に分解し、体験就労から実際の雇用へとつないでいきます。少なくともおひとりを雇用することが、市事業の成果として求められるのですが、それにとどまらず、花苗農家・農村地域と福祉施設との連携関係をつくり広げていこうとしています。

既に、福祉法人が運営する就労支援B型事業所のできる作業を切り出して受委託が成立する見込みとなっていますし、体験就労の機会も継続的なものとなるよう図っています。福祉施設の利用者さんが農村生活を楽しむ機会づくりや、地域の元気づくりの視点も考慮しながら取り組みを進めているところです。

1・2月に第2回目の体験就労の機会を予定しています。ご関心のある方はご一報ください。※この業務は、渡邊美穂も担当しています。

オープンハウスロンドン2018と最近の「バルセロナ・モデル」～バルセロナ編



前号で紹介したロンドンから続いてバルセロナを訪問しました。現地では、昨年の8月末より在外研究中の龍谷大学の阿部大輔先生に、旧市街地と新市街地における都市再生の様々なプロジェクトをご案内頂きました。

■旧市街地における多孔質化

まずは、1980年代以降、急激な人口減少と不法移民の流入などにより不良住宅地化した旧市街地の対策として、行政主体で老朽化した建築物を選択的にスクラップし、小公園や遊歩道などを差し込むように整備、市民が集まる美術館や図書館、大学の一部を移設、既存の市場を再生するなどが行われていました。日本の都市再生にも大変参考になったいわゆる多孔質化を行う「バルセロナ・モデル」の舞台となった地区を見学しました。多孔質化による新たな公共空間の創造は、周辺の建築物の修復や街路空間の再整備、土地の収用により影響を受ける居住者への代替住宅の建設など、様々な整備が連鎖的に行われていました。その結果、公共空間に人が集まり、佇み、憩うことにより、新たな人の流れが生まれていました。特に、あえてスラム化した街区に遊具を配した児童遊園を整備し、子どもやファミリー層を呼び込むことで近寄れない場所をなくしているという戦略が印象的でした。

■経済の低迷と「バルセロナ・モデル」への批判

世界的な都市再生のお手本となっ

た「バルセロナ・モデル」ですが、オリンピック以降、経済が不況下し市場経済主導に代わっていく中で変貌していきます。特に「旧工業地域（ボブレノウ地区）の22@BCNプロジェクトの産業クラスター誘導の停滞やジャン・ヌーベル設計の周辺から断然した中央公園などについては、歴史保全や生活環境の改善などの生活者視点から行政のトップダウン型の都市計画に陥ったとの批判がある」とお聞きしました。

■女性市長によるポスト都市再生の時代へ

2015年には、若い社会活動家バルセロナ初の女性市長に選出され、行き過ぎた観光都市化への抑制や公共住宅の整備など「社会的包括と空間再生の運動、すなわちアーバンデザインの福祉政策化（阿部大輔氏）」に施策を大きくシフトしているとの事でした。

■都市の空き地の再生と道路空間の再編

最近では、市の収用事業による多孔質化から、既にある公共空間の再利用へと施策を転換し、空き地に着目したコミュニティ農園としての暫定利用や、新市街地の9街区を1辺約



写真：上 旧市街地の多孔質化により小広場周辺に店舗が立地
下 スーパーブロック内の歩行者空間化

400メートルのユニット（スーパーブロック）として捉え、内の街路を歩行者空間化するなどの大胆な社会実験が行われていました。また、新市街地では、建て替えに際してセットバックではなく、中庭側を公園に再生する（裏セットバック）など、果敢にチャレンジする姿に、日本の都市の未来を考えていく上で、沢山のアイデアを頂きました。

■町中に溢れる「もう観光客は要らない」という観光公害に対する運動

旧市街地の住宅が民泊やホテルに改築され家賃水準を上げる事で、低所得者層が住めなくなる、地域住民のための店舗や工場が観光客向けの土産屋やチェーン店に変わっていく。ツーリストが夜に騒ぐなど、京都や大阪などで起こっている観光公害の状況がさらに進んでいました。政策的には、ホテルやツーリスト向けの店舗を規制するゾーニングや、旧市街地での新規ホテル建設は規制

して郊外に誘導するなど、相次いで展開しているとの事です。

「嘘だらけの都市バルセロナ・モデル」という声が上がると、市民主体のまちづくりの軽視、公共投資による地価上昇により低所得者層が住めなくなってきたという現実があります。現地を見学しながら説明を受けて、バルセロナも全世界的な観光都市化に際して、葛藤する都市であることを再認識しました。

◆追伸◆

まだまだ怪しい雰囲気漂うラバル地区のさらに奥に、地元の人々があつまるブライ通り（別名ピンチョス通り）があるというので行ってきました。10軒以上のバルが集積していて、当然ながら道路空間で心地良い風を感じながらのバルセロナのセンスアス（官能的）な夜を体験することができました。お勧めです。



センシュアスはブライ通り（別名ピンチョス通り）

バングラデシュ視察で、感じたこと、考えたこと

「バングラデシュは、えらいところやな！」

11月6日の夕刻、チッタゴン空港に着いて市内に向かう道路で、大変な交通渋滞に遭遇しました。片側10mほどのあまり広くない道路には、クルマ、トラック、バス、リキシャ、バイクなどが入り混じり、視察の一行が乗ったマイクロバスはこの渋滞に巻き込まれました。クルマ洪水の中を人間が悠々と横切り、急ブレーキと急ハンドルで、ヒトをひっかけるのではないかと、冷や冷やの連続でした。11月3日から10日まで、実質7日間のバングラデシュ視察でした。今回の視察を通じて、次の3点が強く印象に残りました。

第1は、交通インフラと生活インフラに係ることです。バングラデシュの交通渋滞は筆舌に尽くせないほどの厳しいものでした。高速道路や都市街路、鉄道やバス網など交通インフラの整備は、バングラデシュの国づくりにおいて、待ったなしの最優先課題ではないかと実感しました。同時に、住宅政策（スラム対策を含む）、上・下水道、廃棄物処理といった生活インフラに係る環境整備も急がれていると感じました。

第2は、バングラデシュにおける産業発展についてです。今回の視察では、バングラデシュの産業省、中小企業財団、国家技能開発委員会、チッタゴン輸出促進加工区を訪ねて、関係者からバングラデシュの産業発展状況と産業政策・中小企業政策について説明を受けました。日系企業2社と現地企業5社を訪問し、工場や事務所を案内していただきました。バングラデシュ日本大使館の一等書記官とジェトロのダッカ駐在所長とも懇談しました。

これらを振り返って、バングラデシュ経済について次のような認識を得ました。

- ①バングラデシュの産業構造は、繊維と衣服（アパレル）が主で、機械金属など基盤的な工業は未発達である。
- ②人的資源としての人口は、現在1.6億人（平均年齢23歳）であるが、今後も着実に増加して、2050年には2.6億人に達する見通しにある。
- ③一人あたりのGDPは1600～1700ドルのレベルまで到達しているが、ASEAN（東南アジア諸国連合）の国々と比較してもなお低い水準にある。
- ④バングラデシュは、まだまだ発展途上の国であることは間違いないが、同時に、最近の経済成長率が6～7%と成長著しいことも確かである。

第3は、バングラデシュと日本との関係についてです。11月7日と8日、チッタゴンとダッカで、SME（中小企業）セミナーが開催されました。セミナーには、日本バングラデシュ商工会議所とAOTS（海外産業人材育成協会）の関係者、大学の研究者などが出席しました。ICOSA（アジア中小企業協力機構）を代表して、黒瀬直宏先生（嘉悦大学教授）が「戦後日本における中小企業の発展」についてスピーチされました。中小企業は、それぞれの経済の背骨になり、イノベーションを巻き起こす存在であることが強く印象づけられました。



チッタゴンでのSMEセミナー

適塾路地奥サロンを開催しました

「集まって住むカタチのデザイン
- 世界の美しく小さな集落やまちを訪れて思うこと -」

塗師木伸介：

適塾路地裏サロン実行委員

11月2日に大阪事務所にて建築家の江川直樹さん（関西大学教授）をお招きし、第6回適塾路地奥サロンを開催しました。江川さんはこれまで集合住宅を始めとする数多くの建築を設計されてきたと共に、兵庫県丹波市青垣や京都府八幡市 男山団地等において地域再生、団地再編等にも取り組まれてきました。講演の冒頭では、それらの活動を振り返りながら、当時考えておられた事などを紹介頂きました。

後半は近年通っている南仏等の小さな集落を訪れて感じたことを美しい写真とともに紹介いただきました。その中で、「集落内の日中の写真を用いながら、人はいないけれど人気（ひとけ）があるようにデザインすることが

大切」とお話しされていたことが印象に残りました。

本年は1月23日に第8回として福吉貴英さんをお招きし、実施する予定です。詳しくはホームページをご覧ください。



近況 & イベントのお知らせ

マスター都市プランナーの職務

三輪泰司
名誉会長

日本都市計画学会の推挙を受け、去る 11 月 1 日、都市計画コンサルタント協会から「マスター都市プランナー就任証」を頂きました。

長年の経験で得てきた知恵を活かし、都市計画専門家のブランドと技術力を高めるための奉仕です。

アルパック創業の翌 68 年 6 月、都市再開発法公布。この時代、都市計画法制と都市づくり事業が進み、急速に都市計画専門家が育ちました。71 年 10 月、挑戦した吹田駅前市街地再開発事業の工事事務所開設、11 月、京都駅南口市街地再開発計画 JV 事務所開き。吹田市・京都市当局と建設省都市局の連携を進めつつ、コンサルタントの職能団体を創ろうと、都市問題経営研究所の藤田邦昭さんと奔走し、「協議会」に続き、1975 年 5 月、都市計画コンサルタント協会創立に参画、理事選任。以来 44 年。世界と我が国の都市を巡る状況は大きく変容しています。

キーワードは、市民自治の時代・グローバル時代。低経済成長時代そして激しい人口構造の変化に、課題は、まちづくりの基幹技術たる都市計画の進化、社会計画への深化でしょう。社会進歩は、常に良い面と良くない面が伴いますが、変わらないのは既存の枠を破ること。次の六項を心掛けたいと思います。

- ①国・地方行政機関との協働
- ②各国及び国際機関との交流
- ③経営基盤改善・経営者育成
- ④女性会員の育成・理事登用
- ⑤都市デザイン・様式の研究
- ⑥都市計画アーカイブ・殿堂

2009 年、杉原五郎会長が理事に選任。協会活動の継承とリードに期待します。



新旧の大阪万博をテーマにした まちづくりセミナーが開催されました

坂井信行
都市・地域プランニンググループ

さる 11 月 9 日、日本建築家協会（JIA）近畿支部都市デザイン研究会により「大阪万国博覧会に関係する新旧のまちづくりについて」をテーマとするまちづくりセミナーが開催されました。2025 年の万国博覧会の開催地が決まる直前の時期に、1970 年に大阪で開催された日本万国博覧会を振り返り、両者を比較しながら建築や都市づくりにおけるヒントを得ようという趣旨です。私は都市デザイン研究会のメンバーとして事務局のお手伝いをさせていただきました。

第 1 部は上田篤先生（京都精華大学名誉教授、上田篤都市建築研究所主宰）にご登壇いただき、お祭り広場の整備を中心とする 1970 年万博の会場計画について、西山卯三、丹下健三、岡本太郎などビッグネームのエピソードを交えてご講演いただきました。会場計画は前半の西山研の案を丹下研が引き継いで完成させたというのは有名な話ですが、上田先生はお祭り広場の実施設計にまで関わられました。

第 2 部は橋爪伸也先生（大阪府立大学大学院教授）に、2025 年大阪万博のコンセプトや会場計画について、当時小学生だった 1970 年万博の思い出を交えてご講演いただきました。橋爪先生は、かつて万博に 18 回も訪れたことがその後の万博研究や 2025 年大阪万博への関与にもつながっているとのことでした。開催地決定の直前ということで、多くの方が関心を持って

お聞きいただいたのではないでしょか。

第 3 部は、当社の三輪泰司名誉会長も加わり、パネルディスカッションが行われました。造成から建築まで一連のものとして関わるのが本来の建築家の職能であること、また 1970 年当時と大きく時代背景が異なり、会場も丘陵と海上で全く異なる 2025 年の大阪万博では、未来を見据えた新しい建築や都市像が求められる、といった議論が交わされました。

1970 年万博の会場計画はアルパック創成期のエポックの一つであり、三輪邸から発掘（？）した会場計画に関連する報告書や図面集も会場に展示しました。私自身もアルパックの一員として、先輩方の熱き思いを語り継いでいかなければならないと、気持ちを新たにしました次第です。



パネルディスカッションの様子

開演前の談笑（左から橋爪先生、一人おいて上田先生、三輪）



ここには残っています。値段の交渉や食べ方など、和気藹々と弾む会話は対面販売

中村孝子・塗師木伸介：
レターズアルパック編集委員会



ハレを見つげに商店街へ

アーケードにクリスマスの飾り付けが始まろうとする頃。大阪の商店街にハレを見つげに繰り出しました。

■駒川商店街

探偵ナイトスクープなどでたびたび登場する駒川商店街に初めて来ました。アーケードには、駒川商店街のソングが流れ、どこからともなく響きわたる渋い売り声。そして、対面販売の八百屋、魚屋、肉屋がぎょうさんあり、昔は当たり前にあった市場の賑わいが、こ

ならではの魅力です。乾物屋や魚

屋には、今ではなかなか見かけない棒鰯がつるされていて、もうお正月なんだなあと。立ち寄った魚屋では、魚の鮮度の見分け方、養殖と天然物の違いなどを教えてもらい。「ええいつ、明日は休みやし、今日はおまけや。また、来てやー。ねえちゃんの顔は覚えてたし」とか、威勢のいい売り声に笑いがこみあげてきます。普段、来ない場所ではハレの気分になり、ちょっとはりこんでぶぐを買ってしまいました。

(中村孝子)

■千林商店街

大阪市旭区にある千林商店街はダイエー発祥の地として有名であり、大阪のローカルテレビ番組で大阪のおばちゃんへ意見を求める時に頻りに登場するのでご存知の方も多いかもしれません。商店街では特徴的なテーマソングが流れます。歌詞の「いち・じゅう・ひゃく・せん・せんばやし」という部分は、一度聞くと忘れないリズムとなっています。

私の実家は千林商店街より自転車で10分ぐらいいのところにあり、子どもの頃からよく訪れていまし



た。日常的な利用だけでなく、中学校に入学の際は制服を買いに、成人式の際は晴れ着の袴を借りに訪ねるなど、人生の節目で商店街のお世話になつていきます。

成人式の日にご利用したお店を記憶を頼りに探してみると、今もしっかりと営業を続けており、お店を発見した時には、当日に早起きして訪れ、着付けが終わった後に歩いた朝の記憶が思い出されました。

また、私の祖母は千林商店街から電車で15分ぐらいいのところに住んでいます。お正月用の昆布をここまで買いに来ていました。そういったことを思い返すと、日々の生活(ケ)と人生の節目やお正月(ハレ)のどちらも商店街がしっかりと支えてくれていたのだと再認識しました。

この記事を書くにあたり、久しぶりに訪れると昔あった店が別の店に変わっていたりなど、変化を感じましたが、これからも人々のハレとケを支え続ける場所であって欲しいと思います。(塗師木伸介)

表紙写真：「ハレ」の日の幕開けを感じる清々しいご来光(琵琶湖に浮かぶ白鬚神社/撮影 中村孝子)



「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

ホーチミン 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam TEL+84(028)6255-6732
(ベトナム)



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。